

## 症例報告

# 両側の全耳道切除術を行ったアメリカンコッカースパニエルの1例

佐藤 敏彦

### 要 約

両側の慢性難治性外耳道炎を患うアメリカンコッカースパニエルに対し、両側の全耳道切除術と外側鼓室胞切開術を行った。手術侵襲および術後疼痛共に最重度な術式に対し麻薬性オピオイドの使用で、十分な疼痛管理が可能であった。術後合併症も最小で良好な結果が得られた。

キーワード：アメリカンコッカースパニエル，難治性外耳道炎，全耳道切除術

犬の外耳道炎は一般診療ではよくみられる疾患であるが，慢性化することで管理が長期化し難治性となる例もしばしばみられる。特にアメリカンコッカースパニエルは犬種特性として難治性外耳道炎が多く，その治療管理には苦慮することが少なくない。

今回両側の慢性外耳道炎を患うアメリカンコッカースパニエルに対し，両側の全耳道切除術と外側鼓室胞切開術を行い，良好な経過が得られたのでその概要を報告する。

### 症 例

症例はアメリカンコッカースパニエル，雌，7歳，体重16.5kg。数年前より慢性外耳道炎の治療を続けていたが，抗生物質，ステロイド，抗真菌剤等の治療にも再発を繰り返し，耳道内の慢性炎症や肥厚も進行した。また，徐々に治療に対する犬の抵抗性が激しくなり，飼い主に耳を触られることすら嫌がるようになったため，

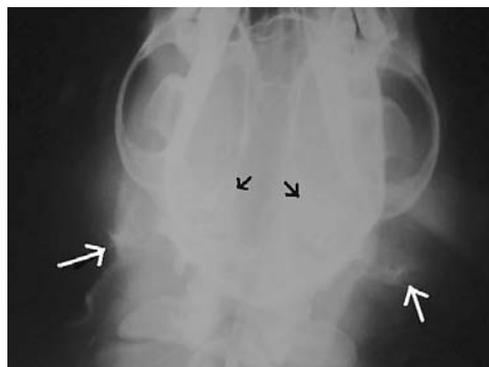


図1 頭部レントゲン写真

頭部レントゲン検査，黒矢印は鼓室胞，白矢印はカルシウム沈着がみられた耳道軟骨

治療管理に著しい障害をきたすようになった。血液検査では特に異常はみられなかった。レントゲン検査では，両側鼓室胞内のX線不透過性の亢進と耳道軟骨へのカルシウム沈着像が認められた(図1, 2)。

### 治療と経過

犬種とレントゲン所見より術式を全耳道切除

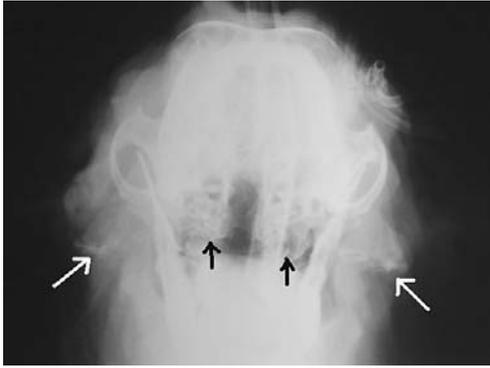


図2 頭部レントゲン写真

頭部レントゲン検査，黒矢印は鼓室胞，白矢印はカルシウム沈着がみられた耳道軟骨



図3 術中所見



図4 術後所見

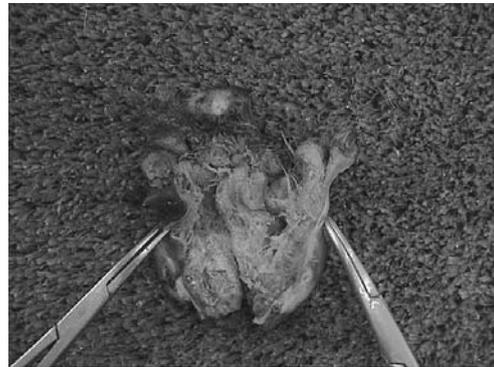


図5 耳道の切除標本



図6 術後3ヵ月

術および外側鼓室胞骨切り術とした。手術の侵襲性と所要時間から片側ずつ行うこととした。術式は成書に則って行った（図3, 4, 5）。また，術前にモルヒネ（塩酸モルヒネ注射液，武田薬品工業，大阪）の投与とフェンタニルパッチ（デュロテップパッチ，協和発酵工業，東京）の貼付を行い，先制鎮痛処置を施した。術中に中耳から細菌培養用のサンプリングを行った。

術後の経過は良好で，手術翌日ドレーンを抜去し，術後3日目に退院させた。細菌培養試験では *Staphylococcus epidermidis* と *Streptococcus* 群が検出された。薬剤感受性検査により得られた結果を基にセファレキシンの投与を1ヵ月間行った。

術後3ヵ月では外貌の変化もなく，発毛も良好で，掻痒感，発赤，脱毛も見られず，触られることを嫌がりもせず，良好な結果であった（図6）。3ヵ月後に反対側の手術を同様に行った。両側の手術後に，聴力の著しい低下または消失が心配されたが，飼い主の話では日常生活に支障をきたすような変化はみられないとのことであった。

## 考 察

慢性の難治性外耳道炎，特に垂直耳道のみならず，水平耳道も炎症により耳道の狭窄が起こっている例では，内科療法のみでは治療の限界を

みる例が多く、外科的介入の必要性に迫られる例が少なくない。しかしながら、外耳炎の進行度によってはV字切開や外側耳道切除術では根本的な治療にならない例もみられる。耳道全体に渡り狭窄がみられる例や鼓室胞にまで炎症が及んでいる例、耳道のカルシウム沈着の重度な例では全耳道切除術が適応と考えられる。本症例は外耳道開口部の肥厚は軽度であったが、耳道内の肥厚狭窄が重度であったために外科手術を選択した。また、このように重度かつ進行症例では外耳のみならず中耳にまで炎症が波及しているケースが多いため、鼓室胞切開術の併用が有効となる [1]。

鼓室胞切開術には外側アプローチと腹側アプローチがあるが、全耳道切除術に併用して行われた両者を比較した報告では効果に大きな差はなく、同一術野からアプローチできる外側鼓室胞切開術が選択される傾向にある [1]。全耳道切除術および外側鼓室胞切開術は手術侵襲性が強く、合併症の発現も高いといわれている。最も多く認められる術後合併症は顔面神経麻痺であり、その発生率は23~63%以上と報告されている [1]。多くは術後一過性にみられるが、10~20%の症例では永久的な後遺症となると報告されている [1]。本症例ではそのような合併症はみられなかったが、炎症が重度で耳道周囲の石灰化が認められる例では特に注意を要すると思われる。全耳道切除術および外側鼓室胞切開術により犬の聴力は全く失われるか、影響を受けないといわれているが [2]、本症例は聴力の消失は認められなかった。進行した慢性外耳炎症例では犬の聴力は極端な低下を示している例が多いため、手術による聴力低下の問題

はほとんどなく、むしろ術後に聴力の回復を思わせる印象を受ける飼い主が多いようである [1, 2]。以上より全耳道切除術および外側鼓室胞切開術は慢性で進行した難治性外耳道炎には十分な効果がみられる手技と考えられた。

また、抗生物質の選択は術中のサンプリング材料からの培養同定と薬剤感受性試験の結果に基づいて行ったが、*Staphylococcus epidermidis* が検出されたことは従来の報告と同様であった [3]。しかしながら、アメリカンコッカースパニエルの場合、プロテウスや緑膿菌が多く検出されるとの報告もみられる [3]。

薬剤感受性はアンピシリンやアモキシシリン、セフェム系薬剤など一般的な薬剤に感受性を示していた。現在、外耳炎等に使用される薬物はニューキノロン系が中心で、耳道内への局所治療剤もゲンタマイシンやニューキノロン剤とステロイド剤の合剤が多いことを考えると意外と盲点なのかもしれない。

#### 参考文献

- [1] Harvey RG, Harari J, Delauche AJ: 外科的切除, 耳道切開および鼓室胞切開, カラーアトラス 獣医耳科学, 岩崎利郎監訳, 233-256, インターズー, 東京 (2003)
- [2] Krahwinkel DJ: 外耳道, スラッター小動物の外科, Slatter D 編, 高橋貢, 佐々木伸雄監訳, 1695-1703, 文永堂出版, 東京 (2000)
- [3] Harvey RG, Harari J, Delauche AJ: 犬の耳道内の微生物学, カラーアトラス 獣医耳科学, 岩崎利郎監訳, 35-41, インターズー, 東京 (2003)